2019年10月18日 本紙 特集 010頁
(C)神奈川新聞社 無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

短編小説 佳作⑥

虹のワルツ

赤澤 俊之 作

あかざわ・としゆき 1957年生まれ。団体職員。横須賀市

終業式の日に通信簿をもらって帰ると、家の玄関にランドセルを放り、バケツと網を持って学校と反対の方へ駆け出した。待ちに待った僕の夏休みが始まった。真っ青な空の色を映す川面を眺め、群れなすメダカを探しながら流れを遡った。田んぼの稲は空に向かって伸び、小川は畔に沿って流れ養魚池へと続き、その奥にまだ行ったことがない青々とした森が立ちはだかっていた。小川は造成されたばかりの住宅地の脇を流れて大岡川へ合流し、関の下あたりで分かれ、上流は日野川と笹下川という呼び名に変わった。

僕は港南出張所の前を通り、関へ抜ける橋のたもとの所で、平たい大きな石碑に目をやった。父からこの橋の由来を聞いたのは、小学校にあがる前、まだチンチン電車が走っていた。これに乗って伊勢佐木町へ行った帰り道、歩き疲れた僕は父におんぶされ、大きな背中越しに石碑を見つけて、何て書いてあるのかと聞いた。父はかがんで、石に刻まれた文字を読もうとした。

「この橋は青木橋って言うんだ、いろいろ書いてあるがよく読めん。」

父の背中から降りて、指で触れてみた。

「昔は道がぬかるんで歩けなかったらしい。橋を掛けてから、人が往き来できるようになったんだ。」

父は眉間にしわを寄せ、風化した文字を指で撫でながら言った。

「大雨が続くと川が氾濫して洪水が起きる、去年の台風のときも溢れそうだったんだ。そうならないように工事をしてるんだよ。」

コンクリートの擁壁が完成すれば、大雨が降っても洪水にならないで済むという。僕は工事が終わるのを待ちながら、川が遠くへ行ってしまうような気がしていた。

初めてコンクリートの壁の出っ張りに足を掛けたとき、いきなり滑り落ちてしまった。半ズボンから出た右の太ももが血だらけになった。出血の割にそんなに痛くはなかったが、トンちゃんがビックリして、壁をよじ登り、近くの家に駆け込んで、助けを求めてくれた。出てきたおばさんが赤チンを塗って、包帯を巻いてくれた。送ってあげるというおばさんに僕は歩けるからと言って、トンちゃんの肩を借りて足をかばいながら家に帰った。

数日後、おばさんの家へお礼に行った。母に言われたとおり、大人しくこうべを垂れて、母とおばさんの長いおしゃべりを聞いていた。その帰り道、笹下川の川べりを歩きながら、二度と川で遊んではいけないと言われたとき、僕は初めてトンちゃんを見かけたときの情景を思い出していた。

青木橋の上から、反物が流れに泳ぐ様子を眺めていた。僕が話しかけると、

「うちで作ってるんだよ。川で洗ってきれいにしてるんだ。」下を指差しながら、

「川に虹が流れているみたいでしょ。」

そう言ってから顔を向けて、少しはにかんだような笑顔を見せた。僕は、虹よりきれいだねと言った気がする。その日から、二人で遊ぶようになった。歳の離れたお兄さんがいて、トンって呼ばれていたから、僕はトンちゃんと呼んだ。家は近所だけど、本名も通っている小学校のことも知らない。姉が二人いる僕は、弟ができた気がして、一緒に川に入って遊んだ。クチボソの捕まえ方を教えてあげると、僕の真似をして、捕まえ損ねて逃げた魚にバイバイと手を振ったりする仕草がかわいかった。意地悪して泣かしたこともあるけど、新しくできた弟との川遊びが楽しくてしょうがなかった。

その夜、台風が近づいていた。丸いちゃぶ台を囲んで夕飯を食べていると、突然、裸電球が消えて真っ暗になった。父がローソクを取り出しマッチで火を付けると、家族の顔が薄っすらと浮かびあがった。

「台風が来るとなんで真っ暗になるの。」

途中で母が話し始めたから、僕の問いは聴こえなかったかもしれない。ローソクの炎が揺れて、ときおり消え入りそうになるのをハラハラしながら見つめていた。母は、川で遊んでるときに怪我をしたこと、一緒に川で遊ぶ友だちがいること、「どこの子？」と父が言いかけた言葉に覆いかぶせるように続けた。

「川っぷちの捺染（なせん）工場の子なの。」

父は僕の顔を覗きこんで、

「そうなのか？」と聞いてから、

「川で遊ぶのは危ないからやめなさい。」

母は僕を問い詰めるように続けた。

「同じ小学校の友だちがいっぱいいるじゃないの、その子と遊ぶのはダメ。」

なぜ遊んではいけないのかわからなかった。僕は黙ったまま揺れる炎を見つめていた。心臓の鼓動が聞こえてきて、手のひらを強く握りしめて膝の上に置いた。胸がキューと締め付けられ、うまく息が吸えなくなるのはいつものことだ。涙が一滴、僕の頬をツーと伝ってゲンコツの上に落ちたことは誰も気付かなかったと思う。「朝鮮人の子」という言葉が頭の中でグルグル回っていた。

雨戸を叩きつける音が激しくなった。

「紀伊半島に上陸した台風は、東海地方を東北東に進み、強い風と雨による…」

父の枕元に置かれたラジオの音声も雑音がひどくよく聴き取れなかった。

「今夜、台風が横浜に近づくらしい。」

父の声が聞こえた。僕はトンちゃんと川で遊べなくなることが悲しくて布団の中で背中を丸めて震えていた。

翌朝、家の前を流れる小川は様子が一変していた。水が濁り上流から流れて来た木の枝が所どころ折り重なり、流れを堰き止めていた。その中に大きな錦鯉が数匹潜んでいるのを見つけた。父に話すと、上流にある養魚池が氾濫して流れてきたのだろうと言った。近所の大人たちが見に集まって来たので、僕はその場を離れて神社に向かった。

長くまっすぐな石段を上ると鳥居が見えてくる。鳥居の手前に脇道があり、下って行くと、鬱蒼とした笹が茂る藪の奥に僕らの秘密基地があった。神社の森に降った雨が浸み出し、大人の背丈ほどの葦が茂る沼に足を取られながら奥に進むと、三方を崖に囲まれ、湧水が流れる沢ガニの楽園があった。石をどかすと、青色の甲羅が素早く横に動いた。川で遊べなくなった僕たちは、この秘密基地で遊んだ。その帰りに、田んぼの畔に寄り、カエルやマッカチと呼ぶアメリカザリガニを捕まえたりした。

夏休みが始まって数日後、僕らはメダカ取りに出かけた。農家の藁葺き屋根が途切れると急に視界が開け、深緑色の森が見えてくる。足もとの流れの中に、春に生まれたメダカが群れているのを見つけて、トンちゃんと顔を見合わせて目を丸くした。僕は興奮して大声を出したらしい。トンちゃんは指を一本口の前に立てて、

「二人の秘密の場所、人に言ったらダメ」

そう言っていたずらっぽく笑った。父は、僕がまだトンちゃんと一緒に遊んでいることを知っていたと思う。でも何も言わなかった。

トンちゃんと最後の冒険に出るきっかけになった出来事があった。夕飯を食べている時に窓ガラスになにかがぶつかる音がした。外に出てみると黒い虫が足元に落ちていた。捕まえて手の甲にのせると、次の瞬間に甲羅を広げて、ちゃぶ台の上の電球めがけて飛び、部屋の壁にぶつかりながら旋回している。父が捕まえて、

「ミヤマが飛んでくるなんて珍しいな。」

「山奥にいるから深山（みやま）と呼ばれているんだよ。こう書くんだ。」

そう言って鉛筆で書いてくれた。これでミヤマと読むことが不思議な気がした。砂糖水を含ませた脱脂綿を前に置くと、オレンジ色の舌を伸ばして吸っている。

「遠くの山から飛んできたんで、お腹が空いてたんだね。」

僕はそう言いながら、まだ行ったことがない、養魚場の向こうに見える山へミヤマを捕まえに行こうと思った。父に話すとすぐ賛成してくれた。山で道に迷わないか心配して、反対していた母へ、父が夏休みの思い出になるからと言うと、渋々認めてくれた。

「一人で行ったらダメよ、誰と行くの？」母が聞いた。

「ゴエモンだよ、前から一緒に虫捕りに行こうと約束してたんだ。」

とっさに級友の名前を出した。石川君はみんなからゴエモンと呼ばれていた。一学期の途中でケンカをしてから一緒に遊ばなくなったのに、名前を出してゴメンと心の中で謝った。捕まえたミヤマを小箱に入れて、目打ちで空気穴を開けて枕元に置いた。しばらくカサカサと這いずり回る音を聞いていたが、すぐに音が遠ざかり眠りに落ちた。

翌朝、母に握ってもらった大きなおにぎりを二つ、魚肉ソーセージと大好きな茹で卵も二つずつ、最後に水筒をリュックに入れ、虫かごをベルトに括り付けて、待ち合わせ場所に向かった。神社の長い石段を二段飛びで駆け上がり、途中で何段あるのか数えたくなり、最初に戻って一段ずつ数えながら上っていると、途中でわからなくなった。石段を見上げると鳥居の下にはにかんだ笑顔が見えた。僕に気づいて手を振っている。

「ミヤマを見せてあげようと思ったんだけど、朝起きたら箱から脱走してたんだ。」

僕は、ミヤマがいかに貴重で珍しいクワガタか話し、地面に石で深山と書いた。知らない字だと言うトンちゃんの顔を昇ってきた朝日が照らし、辺りは薄っすらと明るくなってきた。近くでヒグラシが鳴き始め、僕らの冒険が始まった。

「カナカナって、夕方に聞くと家に帰りたくなるけど、朝は出発の合図だね。」

太陽が顔の高さになる頃に牛小屋に着いた。ここまでは、虫捕りに来たことがあった。

「おはよー」トンちゃんが大きな声で牛小屋に向かって叫ぶと、牛たちが一斉にこっちを向いた。息を止め鼻をつまんで走り抜けると、両側に藪が迫る小径になった。もう誰にも出会わなかった。森の奥へ入って行くにつれて、幅が狭くなり、僅かに残る踏み跡を探しながら歩いた。急な山路になり、しばらく登ると狭い尾根道に出た。ミンミンゼミの大合唱が始まり、ときおりガサゴソと藪を走る小動物の足音が聞こえると、トンちゃんと顔を見合わせて驚いたりした。

森の終点がどこにあるのかわからなかった。いつの間にか真上に昇った太陽の強い陽射しを浴びながらさまよった。トンちゃんは玉の汗が吹き出し、髪の毛がおでこに張り付いていた。肩で息をしてるので、後ろから付いて来るように言って、顔にかかるクモの巣を手で避け、胸の高さまである藪を手と足を使ってこぎながら、ゆっくり歩いた。虫探しに夢中になるうちに、人の踏み跡が消えて、進む方角もわからなくなっていた。

「お兄ちゃん、少し休もう。」

僕は座れる場所を探してから、リュックから水筒とおにぎりを出して、トンちゃんの汗と泥とクモの巣にまみれた顔を拭いてあげた。半分ずつ食べよう、と言うと、

「こんなでっかいおにぎりを食べるのは初めてだ」と言って、二人で口いっぱいに頬張って食べた。トンちゃんのうれしそうな笑顔は、僕の一番大切な場所に仕舞って置こうと思った。

いつもの場所に行ってもトンちゃんに会えない日が続いた。一家は笹下川の淵で捺染工場を営んでいた。壁のトタンが錆びてマダラになっている工場へ一度だけ遊びに行ったことがあったから、道は分かっていた。青木橋を渡ると、二軒並んで差入屋がある。その前を早足に過ぎると、横浜刑務所の高い塀に沿った広い道に出た。無性に会いたくなって、真っすぐな道を全速力で走った。途中で息が切れて苦しくなり、ムカムカして、コンクリート製の高い塀に両手をついて少し吐いた。胃液しか出なかった。

工場の中は暗く静まり返っていた。染料の匂いもなく職人さんもいない。布を漬けていたプールが乾いて鈍く光り、スカーフの柄を描くテーブルがあった場所もガランとしていた。高窓から射す西陽が足元に落ちて、壁にもはっきりした陰影ができていた。筋雲を幾重にも染めた太陽があの森に沈もうとしている情景が、ふと目に浮かんだ。そのとき、後ろから近ずいて来る人影を感じた。

「トンの友だちだね。」

そう言って僕を後ろから抱きよせた。

「よく来てくれたね。トンはもういないよ。」

お兄さんは涙を拭うこともなく、濡れた頬を僕の首に擦り付けながら言った。

「友だちになってくれてありがとう。」

病院に運ばれたときはまだ意識があり、命の火が消える前に、おにぎりが食べたい、と言ったという。お兄さんの身体の重さを感じて少し前のめりになった僕は、あっけにとられ、ただ驚くしかなかった。

後で知ったのは、一家は来日して、横浜の笹下川沿いで捺染工場を営んでいたこと、トンちゃんは横浜生まれで、僕より三歳年下だったこと、戦後、横浜スカーフの需要が高まり、多くの町工場が大岡川とその上流の笹下川沿いにでき、地域の産業として根付いたこと。やがて技術革新とともに淘汰の波が来て、笹下川に反物が泳ぐ光景を見ることが少なくなり、多くの工場が廃業に追い込まれていったこと。

夏休みが終わりに近づく頃、夕食を食べていると、飼っていたスズムシが初めて鳴いた。僕の夏休みが終わりに近づき、すぐ近くに秋が来ていた。ぎこちない鳴き声に耳をすませていると、父が話し始めた。言葉を選びながらゆっくりと。

トンちゃんは、冒険に出かけた三日後に交通事故に遭ったこと。僕は固く握ったこぶしをポケットの中に隠して、込み上がる涙が目から溢れそうになるのを堪えていた。

あの夏、僕らは森をさまよい、真っ青な空を見上げた。湧水は田んぼを潤し、小川は笹下川となり、清らかな流れが横浜スカーフを産んだ。

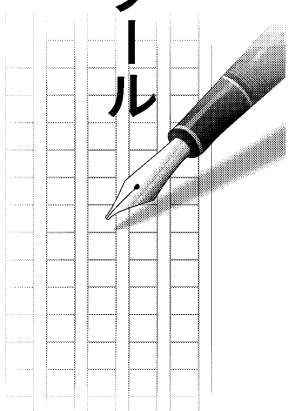
橋の上からこの川を眺めるのは何十年振りだろう。茜色に染まる空を泳ぐ筋雲が川面に色を映し、虹色に染められたスカーフの帯が幾重にも重なり離れて、流れに身をまかせている。川面に遊ぶ光たちは、もうじき終わる夏の輝きの中で楽しそうにワルツを踊っている。そんな情景を子どもの頃に何度も見た気がして目を閉じると、虹の向こうにいたずらっぽく少しはにかんだ笑顔が見えた。

講評

捺染工場のトンちゃんと子どもの僕の、短い冒険。空を映す大岡川や、蝉の声響く山道、森に沈む太陽など、過去の光景を描写力でうつくしく蘇らせる。横浜が開港以来、捺染文化を担っていたとこの小説を読むまで知らなかった。

（審査員・角田 光代）

第49回 神奈川新聞 文芸コンクール



作品の掲載に当たっては、原文通りを原則としています。作品の掲載は今回で終了します。

現代詩 佳作⑦

三日月

鏑木 恵子 作

かぶらぎ・けいこ 1959年生まれ。NPO法人職員。川崎市多摩区

やつでの葉の上にうずくまる青い蛙の中に
心を溶かし入れてきた
セロファンに包まれたひとしずくの心臓を
透明な人差し指が小刻みに叩いている
冷たい夜風に凍えていくゼリー
目の奥に天球図の星がにじむ

この口はちいさな有機体を食べる
更紗模様が刻まれた薄い羽も
わずかばかりの青白いはらわたも
すぐもげるプラスチック細工の足も

わたしはこの体のすぐ内側にいる
足先を振って跳躍の神経を確かめている
この夜のうちにどこまで行けるだろうか
目の前に飛んできた黄色い羽虫を
無意識の反射で絡めとって

一息で飲み込んだ後
強張った喉をうすくふるわせてみる
ああ 声が出た
水笛の響きを持つ細い声が

守ることも守られることもない
むきだしの濡れた青
わたしの腹の奥でもがく手足
突き破ろうと力果てるまで噛み付く歯牙
外側にめくれあがりそうな嚥下作用

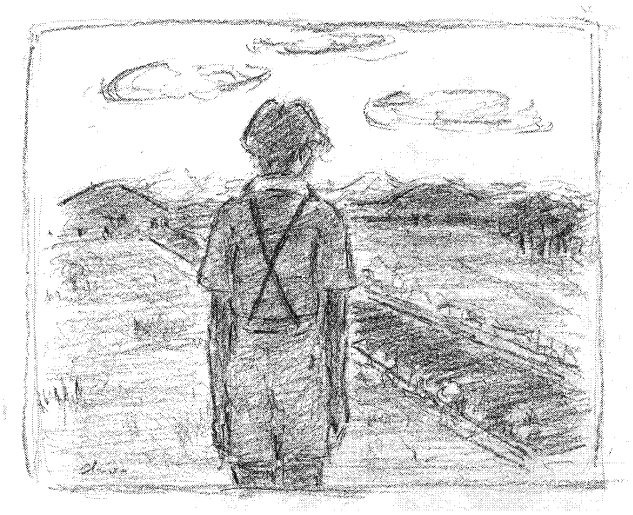
輪廻の舞踏に急かされるように
さあ まず左足 傾いた水平に身体を添わせ
次に右足 吸盤をきつく張り付けて
たわんだ葉の縁から次の縁へと

一人の夜を跳び移っていく
行く先々にいくつもの小さな悲鳴
最後に迫る大きな虚ろに呑み込まれぬよう
金色の虹彩を横一文字に引き絞り
皮膚のすべてで月光を呼吸する

講評

葉の上にいる青い蛙を観察し、いつしかその中に自己投影されていく作者がいる。詩の構成、言葉の使い方、物事を見る目、すべてにおいてうまく書かれている。だが、詩とは不可思議なもので、完璧な中の不完全さが私には見えてしまった。

（審査員・金井 雄二）



小林 千枝 画

授賞式のお知らせ

授賞式は11月16日午後2時から、ニュースパーク（日本新聞博物館）イベントルーム（みなとみらい線日本大通り駅3番出口直結。またはJR・横浜市営地下鉄関内駅徒歩10分）で。式に続いて、両部門審査員を囲んでの講評会も行います。

授賞式・講評会は、受賞者以外の方も無料で参加できます。希望者は往復はがきで、郵便番号231-8445（住所不要）神奈川新聞社文化部・文芸コンクール係へ申し込んでください（10月31日必着）。